

## 先スキタイの馬具成立に関する諸問題

### Issues on the formation of Pre-Scythian harness

中村 大介\*

NAKAMURA Daisuke

先スキタイの馬具には大別してノヴォチェルカスク類型とチェルノゴルフカ類型の二系統がある。本稿ではそれぞれの類型の特徴を整理し、時期による差異ではないことを再確認した。また、チェルノゴルフカ類型は東方のアルタイ・サヤン地域を起源とすると考えられているが、少なくとも鑣については、直前の型式は黒海周辺で連続的に変化しうることを明示した。加えて、馬に操縦に関する馬具の改良についても、アルタイ・サヤン地域ではなく、黒海から西アジアの範囲で先行することを指摘した。

キーワード：先スキタイ、馬具、騎馬遊牧民

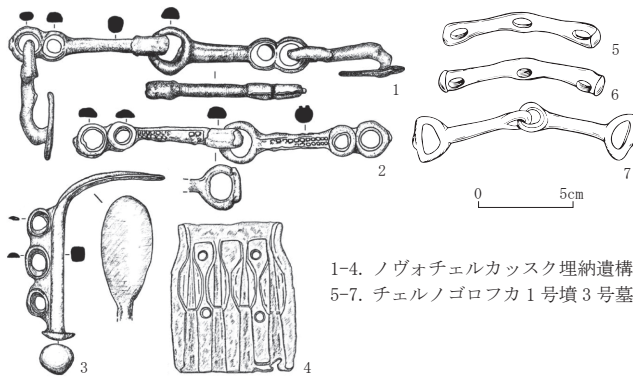
### はじめに

ヘロドトスは『歴史』のなかで、スキタイが現れる以前の黒海北岸は、キンメリオイの地であったことを伝えている（His. IV. 11-12; 松野訳 1972）。彼らはスキタイに追われて小アジアに逃亡したが、アッシリアの記録ではサルゴン II 世の治世である前 722～前 715 に南カフカスのウラルトゥを攻撃し（雪嶋 2008: 52）、前 714～前 625 年にはアナトリアの政治に関与していたという（Cunliffe 2019: 106）。

黒海周辺の考古学的な時期区分では、在地のベロゼルガ文化（Belozerkka）からスキタイ時代の間に先スキタイ時代が設定されているが、今日の研究ではそれがキンメリオイの時代と考えられている。キンメリオイもまたスキタイと同じ騎馬遊牧民と考えられており、黒海より西方に影響を与え、トラキア・キンメリア青銅器群（Thraco-Cimmerian bronzes）を形成していた。文献での記述は少ないながらも、黒海とその周辺地域にかなり大きな影響力をもっていたといえる。前 12～前 10 世紀のベロゼルガ文化の時期に遺跡数が激減することが指摘されているように（Makhortykh 2004）。草原化の進行で以前の生業に変更が生じ、遊牧生活に適応した人々の影響力が増していたのである。

一方、キンメリオイはスキタイに先立って独特の馬具と短剣を使用していた。かねてより、それらは東方のアルタイ・サヤン地域からの影響であることが指摘されている（Тереножкин 1976; Bouzek 2001）。しかし、中・東欧の青銅器時代末期との関係や近年の放射施炭素測定年代

\* なかむら・だいすけ、准教授・埼玉大学教養学部、哲学歴史専修・考古学



1-4. ノヴォチェルカスク埋納遺構  
5-7. チェルノゴロフカ1号墳3号墓

図1 ノヴォチェルカスク類型とチェルノゴロフカ類型  
(Вальчак 2018, Тереножкин 1976)

の成果を考慮すると、より複雑な状況であることわかってきた。そこで、本稿では馬具の由来に関して先行研究を整理しつつ、二系統の馬具の関係について検討を行う。キンメリオイと初期のスキタイの馬具に関する研究動向については、すでにイヴァントチク (Ivantchik 2001) と雪嶋宏一 (2008) が詳細に整理しているので、以下ではこれらの研究を参照しつつ、主要な部分を再整理するかたちで進めたい。なお、今回は、黒海から北カフカスに本格的に侵入したスキタイを初期スキタイとよぶ。また、初期スキタイ以前の騎馬遊牧民については全てがキンメリオイかは明確ではないため、先スキタイとよんでおきたい。

## 1. ノヴォチェルカスクとチェルノゴロフカの年代観

黒海周辺の鉄器時代の馬具には古くから二系統あることが知られ、ノヴォチェルカスク (Novocherkassk) 埋納遺構資料とチェルノゴロフカ (Chernogorovka) 1号墳3号墓資料を基に大別されてきた (図1)。前者は銜環が二連で8の字になった銜と、一方の先端が傘状でもう一方の先端が匙状の鑣が組み合う。頭絡などを通すための孔は三つのリングになっている。後者は銜環が半月形の銜と丸みを帯びた棒状の鑣が組み合う。頭絡などを通す孔は三つで鑣の身部にあけられている。本稿では用語が複雑となるため、上述の馬具について、次のように呼んでおきたい。まず、ノヴォチェルカスク埋納遺構の銜をI型銜、鑣をA型鑣として、その組み合わせをノヴォチェルカスク類型とする。そして、チェルノゴロフカ1号墳号墓の銜をII型銜、鑣をB型鑣とし、その組み合わせをチェルノゴロフカ類型としておく。

イエッセンはノヴォチェルカスクの銜が後世の初期スキタイにも伴うことから、こちらの馬具を新しいものと考えた (Иессен 1953)。しかし、テレノシュキン (Тереножкин 1976) は北カフカスのクバン地方の発掘成果から、逆にチェルノゴロフカが古く、ノヴォチェルカスクが新しいことを示した (高浜 1979; Ivantchik 2001)。年代に関しては、キンメリオイ以前のペロゼルカ文化が前1150～前900年、チェルノゴロフカ段階が前900～前750年、ノヴォチェルカスク段階が前750～前650年としている (Тереножкин 1976: 203)。そして、カラスク系短剣が黒海周辺に流入した結果、この地で十字柄鉄剣が形成されたと考え、前10～前9世紀に東方の影響を受けて先スキタイの文化が成立したと結論付けた<sup>1</sup> (Тереножкин 1976: 132)。

<sup>1</sup> 現在の研究では前10世紀のミヌシンスクはタガール文化初期のバイノフ期である (Bokovenko 2006)。

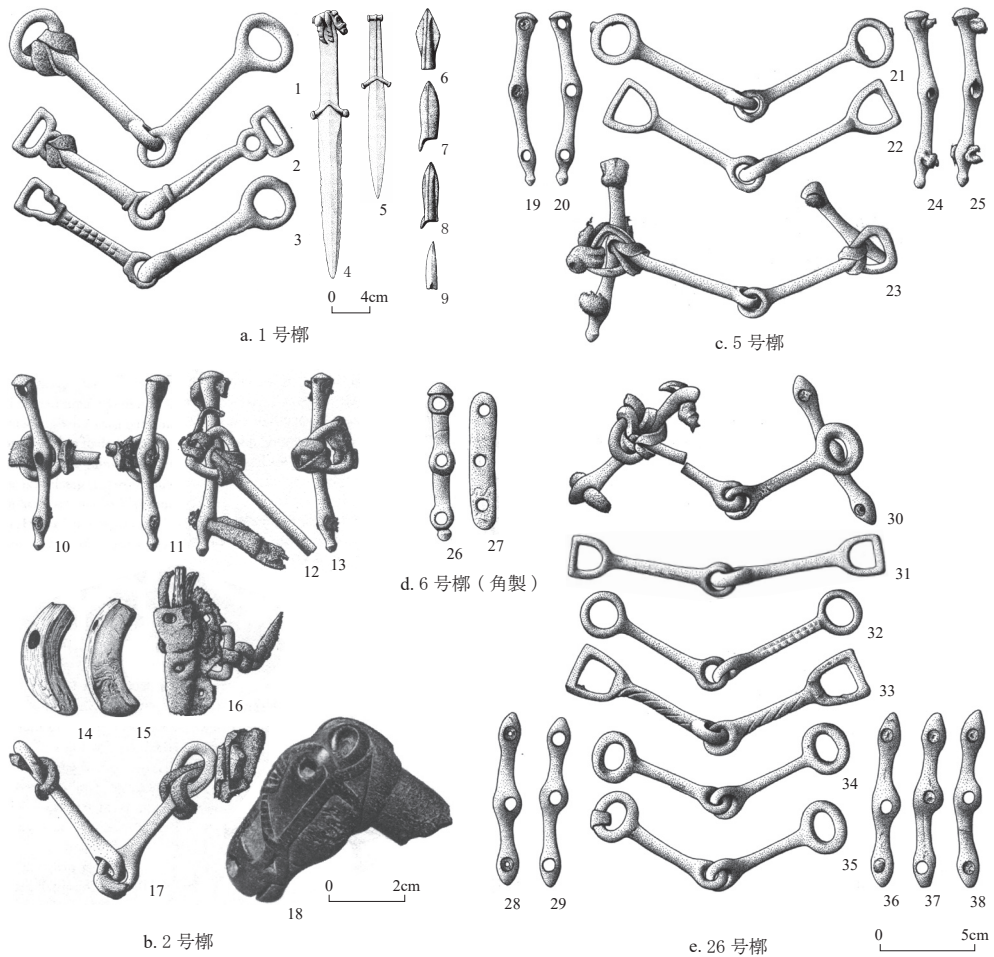
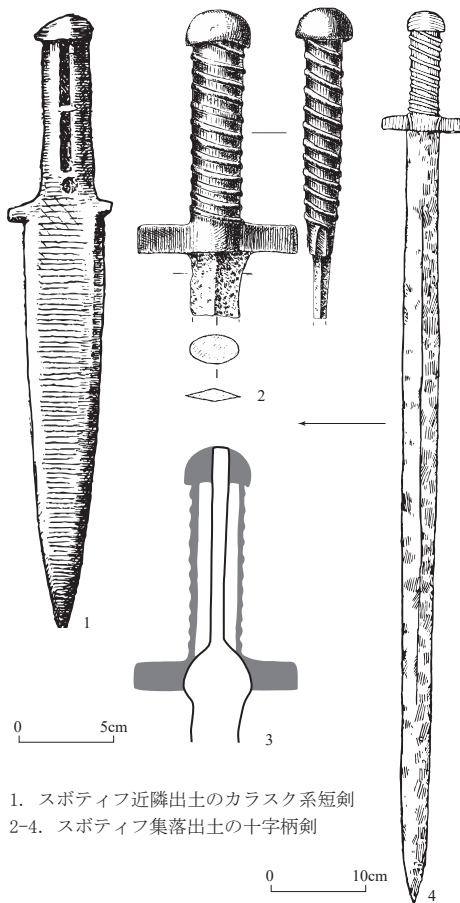


図2 アルジャン1号墳の馬具と関連遺物 (Grjaznov 1984)

コサックも同様の年代観であるが、ノヴォチェルカスク類型にみられる金製品をウラルトウやアッシリアのものとし、スキタイ侵入後のキンメリオイの南下のより獲得されたものとした (Kossack 1994)。そのため、ノヴォチェルカスク類型と初期スキタイを同時期と考え、前8世紀後半以後としている。こうした編年観は多少年代が遡りつつも今日も支持されている (Parzinger 2013: 915; Cunliffe 2019: 103)。

しかし、この順序にはかねてから異論があり (高浜 1979: 109)、クロシコヤマホルティフは (Клочко, Мурзин 1987; Клочко 2009; Махортых 2008)、開始時期の見解は異なるものの、ノヴォチェルカスクとチェルノゴルフカ類型の併存を説く。また、ヴィソカ・モギーラ古墳の放射性炭素年代をみると (Алексеева и др. 2005)、ノヴォチェルカスク類型の開始時期には議論の余地がある。ただ、これら二つ類型は個々の墓での認定基準が不明瞭である論考が多く<sup>2</sup>、問

<sup>2</sup> マホルティフ (Махортых 2008) のチェルノゴルフカ類型とノヴォチェルカスク類型の分類は、馬具の型式がお互い混ざり合っており、基準が不明瞭である。



1. スポティフ近隣出土のカラスク系短剣  
2-4. スポティフ集落出土の十字柄剣

図3 スポティフ集落出土の剣と近隣出土の短剣 (Клочко 2009)

題が複雑する要因となっていることは否めない。

テレノシュキンの研究によって、チェルノゴロフカの銜 (II 型) のほうが古いとされたにも関わらず、時期が下の初期スキタイにも伴う理由については、アルタイ・サヤン地域のアルジャン 1 号墳 (Arzhan) の発掘と放射性炭素年代の成果である程度明らかになった。原スキタイの墓といえるアルジャン 1 号墓からはチェルノゴロフカ類型が出土し (図 2)、年代もかなり高い確率で前 810 年、つまり前 9 世紀末であることが示された<sup>3</sup>。つまり、初期スキタイが来る以前に原スキタイが騎馬に関する文化を広げ、キンメリオイがそれに対応したという解釈が可能となったのである。

一方、民族の帰属に関しては、テレノシュキンをはじめ多くの研究者がチェルノゴロフカ、ノヴォチェルカスクともにキンメリオイに帰属すると考えている。しかし、クロシコ (Клочко, Мурзин 1987) は前者を原スキタイ、後者をキンメリオイと考え、キンメリオイが存続しているなかに初期スキタイとは異なる原スキタイが入ってくるとした。さらに、クロシコ (Клочко 2009) はドニエプル川中流域のスポティフ (Subotiv) 集落の事例から自説を補強している。

スポティフ集落の近隣でカラスク系短剣が出土し (図 3: 1)、集落内ではその影響を受けた十字柄のバイメタルが出土している (図 3: 2-4)。また、集落には土塁があり、下には築造のための犠牲者が埋められていた。その放射性炭素年代データの平均が前 825~前 801 年であることから、クロシコは、テレノシュキンと同様にカラスク系短剣の影響を考慮しつつ、アルジャン 1 号墳でも古く遡った放射線炭素年代データと比較して、東方から黒海に「チェルノゴロフカ文化」の侵入があったと主張した<sup>4</sup>。しかし、カラスク系短剣の影響で成立する十字柄のバイメタル剣/短剣は基本的にノヴォチェルカスク類型に伴う点に問題がある。なお、原スキタイがキンメリオイのなかに混じっていたのか、原スキタイの諸族の一つとしてキンメリオイと併存していたのかも現在は議論に進展がない。

<sup>3</sup> アレクセエフら (Алексеев и др 2005) の分析で 831-801BC、前 810 年頃である。

<sup>4</sup> クロシコは 2006 年の論文では、アルジャン 1 号墳の年代は前 810 年とし、アルタイ・サヤン地域の変化と同時的であるが、カラスク系短剣の存在から前 834~820 年に「チェルノゴロフカ文化」が東方から黒海に来たとしている (Klochko et al 2006)。

### 3. チェルノゴロフカ類型と鑢の形成

ここでは、チェルノゴロフカ類型の年代と形成について考えてみたい。チェルノゴロフカ類型のB型鑢は、骨角鑢と類似した形態をしており、実際にドニエスタ川中流域のスロボジヤ3号墳3号墓では骨角製のB型鑢がみられ(図4)、アルタイ・サヤン地域のアルジャン1号墳6号櫛でも出土している(図2:26)。このアルジャンの事例は骨角製であるが、青銅製のマラヤ・ツィンバルカ(Malaya Tsimbalka)の事例(図5:1-2)に類似している。また、黒海北岸のB型鑢には端部が傘状になっているものもみられるが、アルジャン1号墳でも端部が丸く収まるもの(図2:28-29, 36-38)と傘状になるもの(図2:10-13, 19-20, 24-25)の二つがある。銜環についても半月形だけでなく円形もみられるが(図4:10-13)、アルジャン1号墳でも同様に円形のものも含まれる(図2:3, 21, 30, 32, 34-35)。

チェルノゴロフカ類型がみられる範囲は、ドニエプル川下流域のマラヤ・ツィンバルカ(図5)、ウクライナ東部のビリユコヴォ(Biryukovo)など、黒海北岸が主体であるが、カルパチア山脈の東西や北カフカスでは鑢と銜がセットではなく、他の類型と合わさって出土することがある。また、II型銜でも円形銜環になったものが東欧、中欧に広がるが(Makhortykh 2008)、ベティシュ(Vetis)やフレグ(Frög)ではノヴォチェルカスク類型のI型銜の銜環に付属するL字状金具がしばしば組み合う。

ヴァリチャクがセルジェン・ユルト(Serzhen-Yurt)型と呼ぶ鑢の端部の傘が大型化したものは、ドネツ川中流域のカミシェヴァハ(Kamyshevaha)、クバン地域のカザゾヴォ(Kazazovo)3号墓など、黒海の東側に多く分布する(Вальчак 2009: 81-82)。

短剣や剣については、出土状況が曖昧ながら、北カフカスのドゥブロヴァヤ・ロシヤ(Dubrovaya Roshya)から鏢の形がやや特異なバイメタルの十字柄短剣が出土している(図5-18)。ただし、ここでは珍しく、B型鑢とノヴォチェ

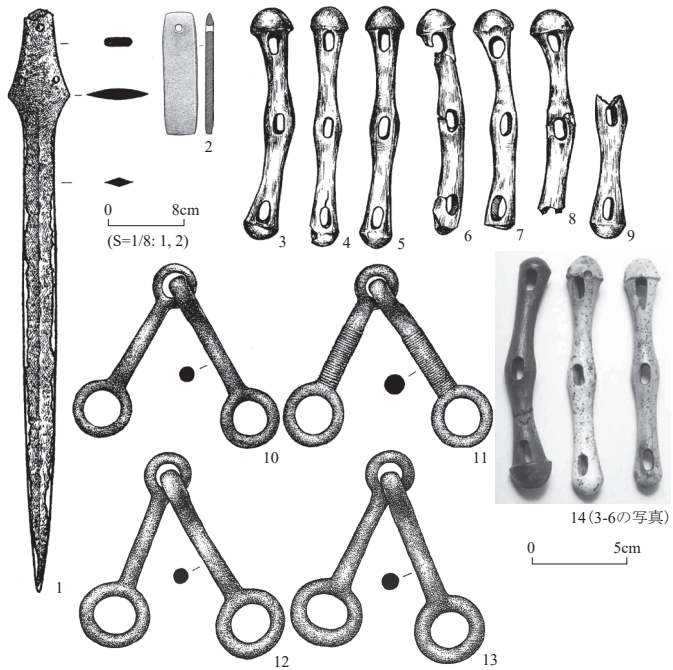
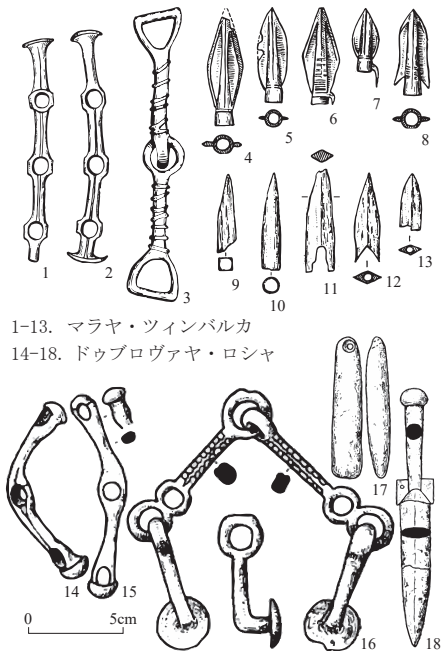


図4 スロボジヤ3号墳3号墓の副葬品  
(Махортых 2008, Синика и др. 2016)



1-13. マラヤ・ツィンバルカ  
14-18. ドブプロヴァヤ・ロシヤ

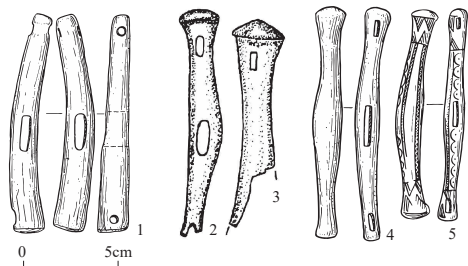
図5 チェルノゴロフカ類型の事例  
(Махортых 2008, Петренко 1982)

ルカスク型のI型銜が相伴しているため、この短剣は後者に伴う可能性が高い。また、前述したスロボジヤ(Slobodzeya)3号墳3号墓では、西方の骨壺墓文化に接する地域であるため、骨壺墓文化やハルシュタット文化に伴う型式の鉄剣が出土している(図4-1)。近隣の骨壺墓を営むポドリ(Podoli)文化のブルノ・オブジャニ(Brno-Obrany)169号墓で類似した鉄剣が出土しており(Махортых 2008)、青銅器時代から鉄器時代への移行期(Kimming 1981)、つまり前9世紀末~前8世紀初頭<sup>5</sup>の資料と位置付けられる。

これまでのところ、チェルノゴロフカ類型の武器のうち、銅鏃や骨鏃はアルジャン1号墳のものに類似している(図2: 6, 9; 図5: 4-13)。しかし、短剣については、アルジャン1号墳に伴う型式(図2: 4, 5)は黒海北岸から北カフカスにおいて出土しない。黒海周辺では他文化の鉄剣をもつ場合を除き、チェルノゴルファ類型には定型化した短剣が伴わない点に留意したい。アルジャン1号墳を造営した人々

がそのまま来たわけではないことを意味するからである。

ところで、チェルノゴロフカのB型鏃の起源に関して、ヴァリチャク(2009: 89)はウサトヴォ(Usatovo)型の骨角製鏃を挙げている(図6: 2-5)。この型式の鏃は前2000年紀末~前9世紀頃に東欧に分布し、そのうち、バイ-キヤト(Bay-Kiyat)の1974年調査区住居出土資料は、サバティノフカ-ペロゼルガ文化段階であり(図6: 2-3)、前11世紀を上限としている(Колотухин 2000: 552)。また、骨角製の角鏃と棒鏃自体が最初に東欧で出現し、スポティフ村の事例(図6:



1. スポティフ村 2-3. バイ-キヤト1974年調査区  
4-5. スポティフ集落6号住居

図6 先スキタイ以前の骨角鏃  
(Тереножкин 1976, Колотухин 2000)

1)のように青銅器時代後期には広く分布していたため、中欧から東欧でウサトヴォ型が成立し、B型鏃に変化したという変遷が成り立ちうる。しかし、この場合、先スキタイの文物、特にチェルノゴルファ類型がアルタイ・サヤン地域を起源とするという論と矛盾する。近年のDNA分析の成果から、キンメリオイはアルタイ・サヤン地域に近い人々であったことが示されており(Krzewińska et al. 2018)、人の移動はやはり東から西であった蓋然性が強い。また、ウサトヴォ型

<sup>5</sup> 近年の研究ではハルシュタットBからCへの移行は前800年頃とされている(De Mulder et al. 2009)

は両端が同じ形状をもつ上下対称の鑣であるが、スポティフ村事例は角の形状が残されているため、片端が細いという型式的なヒアタスもある。

一方、ミヌシンスク盆地のカラスク文化末期段階（前 11～前 9 世紀頃）のトルガチャク (Torgazhak) において、上下対称の骨角鑣が出土している (Савинов 1996; 高浜秀 2011)。この事例を積極的にウサトヴォ型の形成に関与させられるならば、中欧から東欧で形成された角鑣と棒鑣がアルタイ・サヤン地域の鑣に影響し、それがカラスク文化の拡散とともに黒海沿岸に還流したか、角鑣が広がった際に形成された交流網を通じて草原地帯の東西で共時的に形成されたかということになる。ただし、カラスク文化末期のアルタイ・サヤン地域における馬具形成についての資料は乏しい。また、チェルノゴロフカ類型の B 型鑣は上述したように骨角鑣を含むことから、黒海においてウサトヴォ型から型式変化したこと自体はほぼ確かであり、先スキタイの時期に東方から馬具がもちこまれたとはできない。加えて、この種の骨角製から青銅製への転換は、アルタイ・サヤン地域周辺から黒海沿岸の広い地域で同時に進行した可能性が高い。というのは、アルジャン 1 号墳ですでに骨角製と青銅製の B 型鑣が出土しているからである。また、アルタイ・サヤン地域では三孔のうち、上下の二孔の方向が 90 度異なる骨角製鑣が併存するが、高浜秀 (2011) の研究を参照すると、同じ型式の青銅製鑣もこの地域で出現する。

中国でも草原地帯に近い興隆県小河南村や昌平白浮では、西周前期～中期に黒海周辺で出土するのと同じ茸形把頭をもつカラスク系短剣が出土している (中村 2012: 54)。カラスク文化末期の前二千年紀末に草原化が進行したが、この際、アルタイ・サヤン地域を挟んで東西にカラスク系短剣が到来していたのである。つまり、キンメリオイやスキタイよりも前にすでに草原地帯の交流網が形成され、東から西への人の移動もあった可能性が高い。

#### 4. ノヴォチェルカッスク類型の特質

チェルノゴロフカ類型に短剣が乏しいのに対し、ノヴォチェルカッスク類型には北カフカスのクバン地方と共通する鉄製及びバイメタルの短剣や剣が伴う。前述したようにその年代は前 8 世紀後半～7 世紀とされることが多いが、ノヴォチェルカッスク類型に近い文物が伴うヴィソカ・モギーラ (図 7) では 2 号墓で  $2740 \pm 50$  で 1000-800 BC、5 号墓は  $2765 \pm 50$  で 1020-800 BC となっている (Алексеев и др. 2005)。放射性炭素測定年代をそのまま受け入れるならば、前 10 世紀末～前 9 世紀初頭となり、かなり古い。

2 号墓からは金製の飾金具 (図 7: 45)、金製鞞飾 (図 7: 47)、鉄製短剣 (図 7: 49) が出土している。短剣は全長 42cm で両端が剣身方向に尖る鏢をもつ。5 号墳からはいくつかの金製品 (図 7: 1, 3-5)、馬具 (図 7: 6)、短剣 (図 7: 8) が出土している。鉄製短剣は長い茎をもち、柄が無い。スポティフ集落の十字柄剣の剣身と同様であることから (図 3)、バイメタル短剣として製作されたのだろう。馬具は鑣と銜の一体型のものが出土しており、銜環に先端が円盤状の L 字金具が付く。鑣部分は二孔が空いているが、両端が極めて短く、他の類例に乏しい。この鑣部分に類似する角骨製のものはチェチェリエフカ (Chechelievka) 2 号墳 8 号墓で出土しており

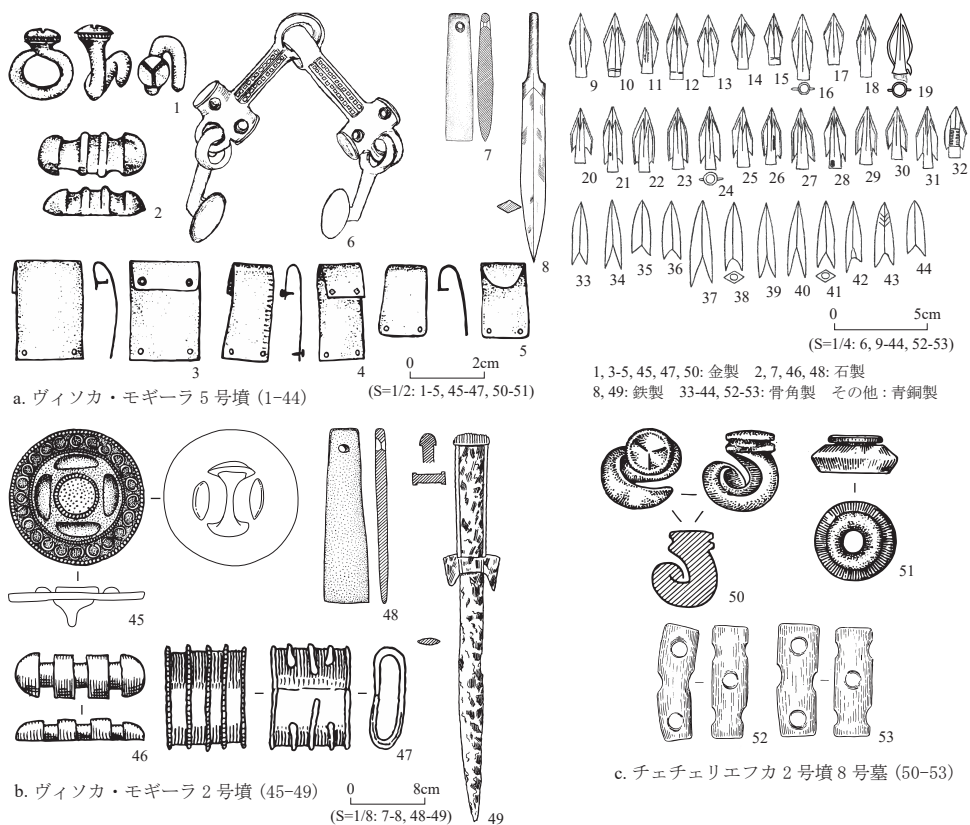
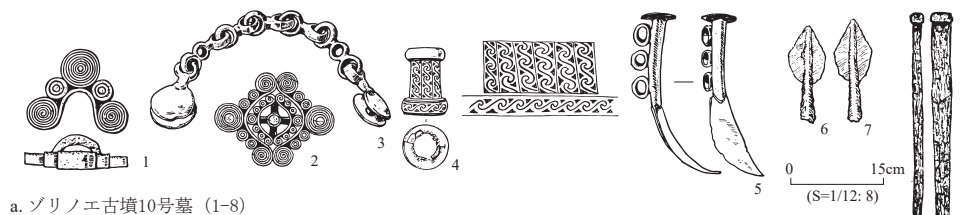


図7 ヴィソカ・モギーラ及びチェチェリエフカ墳墓の副葬品 (Махортых 2008, Бокий и др. 1985)

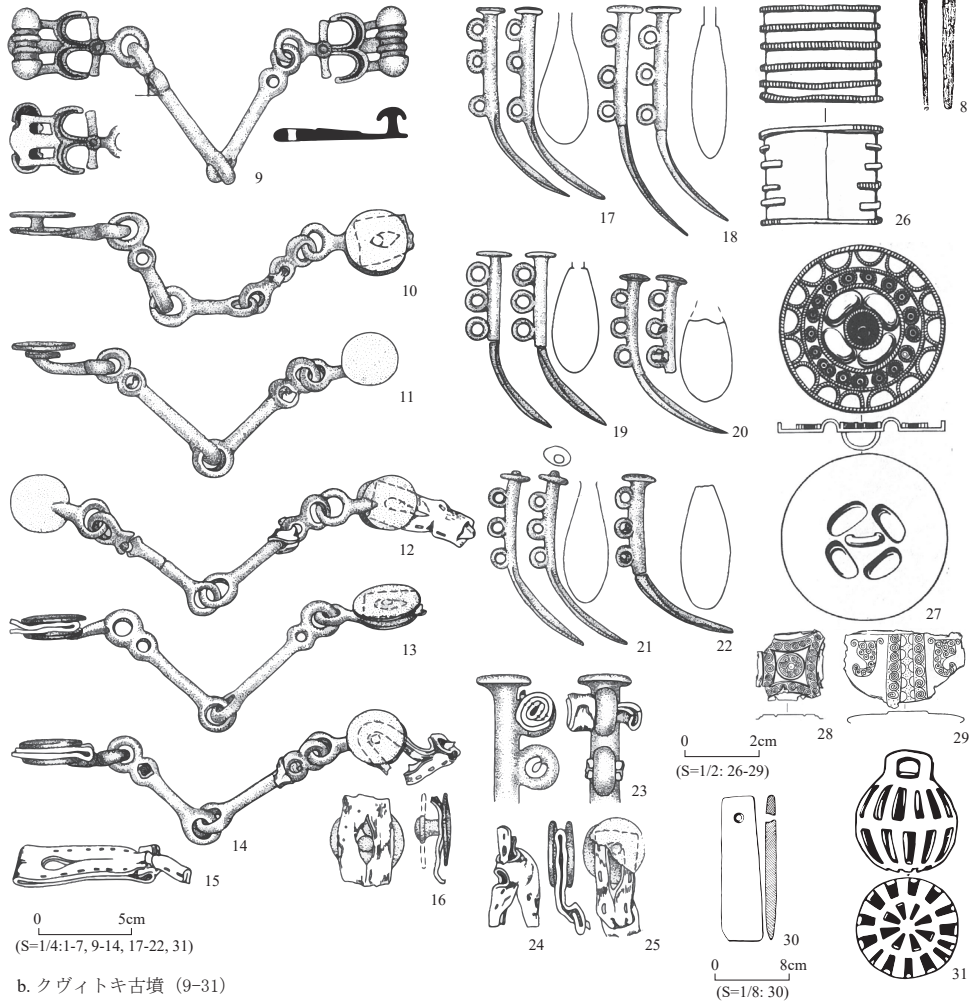
(図7: 52-53, Вальчак 2009: 63)、年代は前9世紀とされる (Бокий, Горбул 1985)。ここからはヴィソカ・モギーラ 5号墳と同じ先端が円盤状の螺旋金製品も出土している (図7: 1, 50)。ヴィソカ・モギーラの銜の身部には一条の突線を挟んで二列の粒文がみられることと、L字金具が伴うことから、I型銜に近く、ノヴォチェルカスク類型に属するといえよう。しかし、しばしばチェルノゴロフカ文化の墓として扱われており (Алексеева и др. 2005; Махортых 2008)、混乱のもとになっている。

一方、イヴァントチクは遺物の型式学的検討から、ノヴォチェルカスク類型の年代の遡及を検討している。ハンガリーのティサ川流域に位置するプルジ(Prügy)埋納遺構ではハルシュタット B2 期の遺物が出土し、そこと共通する遺物がノヴォチェルカスク類型をもつ北カフカスのファルス(Fars)墓地 35号墓で出土していることから、ノヴォチェルカスク類型は前9世紀に遡ることを示した (Ivantchik 2001: 128) また、茎がソケットで鎌身が矢羽根のような形をしている銚茎二翼鎌は、中欧ではハルシュタット B1-B2 期 (前10~9世紀) にみられるものであるが、ヴィソカ・モギーラ (図7: 20-31) やマラヤ・ツィンバルカ (図4: 8) でも出土するため、ノヴォチェルカスク、チェルノゴロフカ類型はともに前9世紀には開始するという





a. ゾリノエ古墳10号墓 (1-8)



b. クヴィトキ古墳 (9-31)

図8 ゾリノエ及びクヴィトキ古墳出土品 (Makhortkykh 2008, Ковпаненко и др. 1984, Ivantchik 2001)

(Ivantchik 2001: 134)。なお、ヴィソカ・モギーラとマラヤ・ツィンバルカでは、全く同じ基部に片逆刺をもつ木葉形の銅鏃が副葬されていることから (図4:7, 図7:19)、イヴァントチクの推定は極めて妥当性が高い。

クリミア半島のゾリノエ(Zolynoe)1号墳 10号墓では、同心円と波文をもつ金製装飾品 (図8:1,2,4)、A型鏃、茎の長い木葉形銅鏃、柄の無い鉄剣が出土している (Makhortkykh 2008:

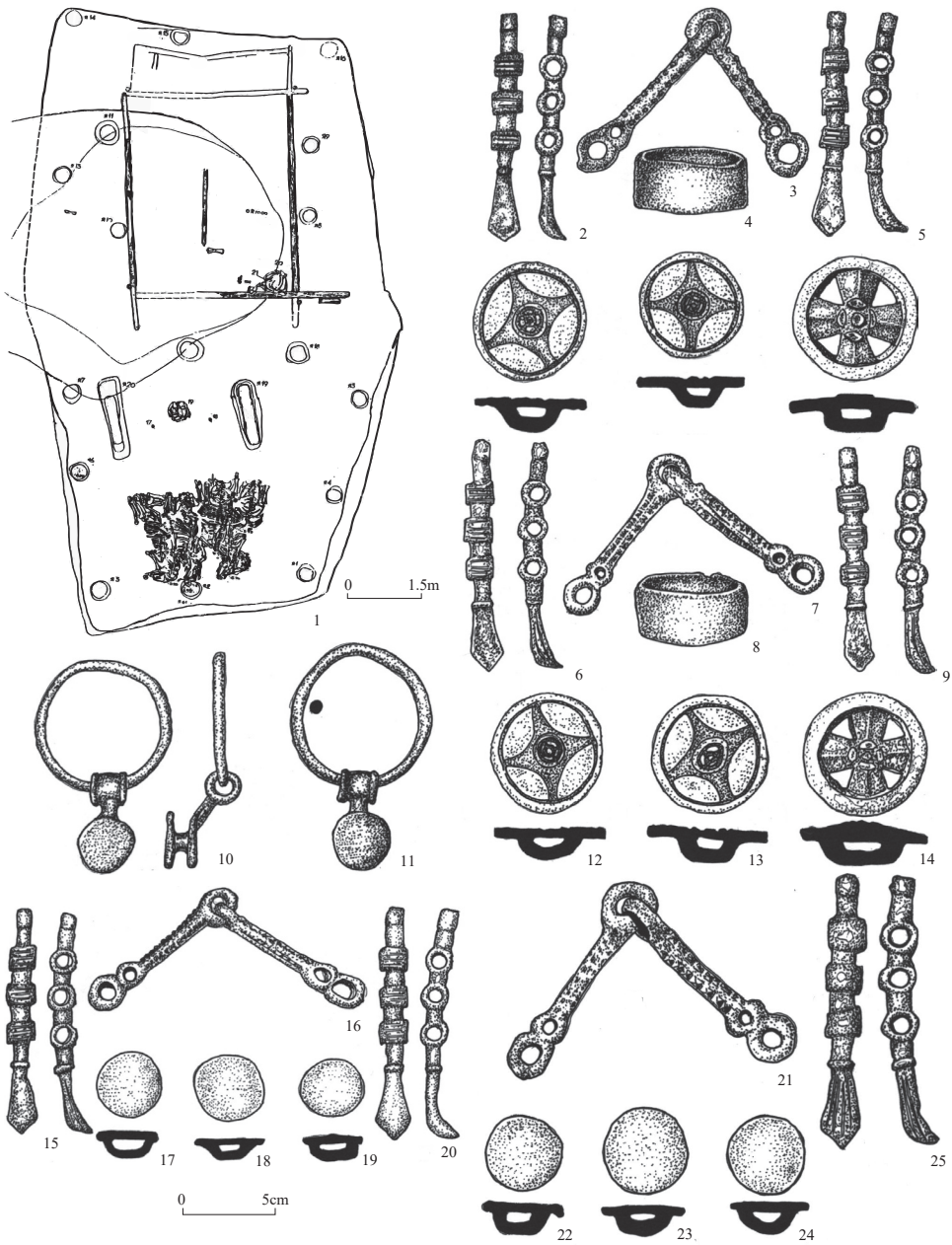


図9 ウアシトウ1号墳と副葬品 (Эрлих 1994, Ivantchik 2001)

241)。この遺跡は多くの点で北カフカスのクヴィトキ (Kvitki) 古墳と共通しており、ノヴォチェルカッスク類型でも前8世紀前半頃に相当すると考えられる (Ivantchik 2001)。また、この時期になると、銜環に付くL字状金具は先端が上下ともに円盤状になったものが出現し (図8: 10-14)、馬具以外の連結具にも採用される (図8: 3, 図9: 10, 11)。アナトリアで出土するキンメリ

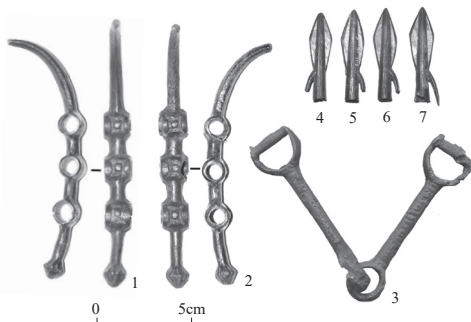


図 10 ジャボチン 524 号墳の副葬品  
(Рябкова 2014)

オイの銅鑿の茎が長いことと、初期スキタイとの併行期にあたるジャボチン 524 号墓の銅鑿も同様に茎が長いことを考慮すると(図 10: 4-7)、茎が短いヴィソカ・モギーラ 5 号墳やマラヤ・ツイバルカの鑿がより古式と考えられる。アルジャン古墳の時代も同様に短い茎であることから(図 2: 6)、これらが前 9 世紀代の資料に該当するといえよう。問題はクヴィトキ古墳出土の金製品であり(図 8: 26-27)、これらと類似する資料がヴィソカ・モギーラ 2 号墳から出土

している(図 7: 45, 47)。若干型式が異なるので、前後関係に置くこともできるかもしれないが、ヴィソカ・モギーラ 2 号墳が 5 号墳に後続する可能性も考えられる。この点は今後の課題としておきたい。

一方、ノヴォチェルカスク類型は初期スキタイと共伴することも古くから知られている。ドニエプル川中流域のジャボチン 2 号墓では、I 型銜と II 型銜が共伴しており、すでにスキタイのディフォルメされた動物飾や意匠も伴う(Вязьмитина 1963)。この事例によって初期スキタイの時期まで I 型銜が存続することがわかった。また、ジャボチンには集落があり、その出土土器から三期区分の編年が組まれてる。ジャボチン 2 号墓は 524 号墓とともにジャボチン II 期に該当し、年代は前 8 世紀後半という(Daragan 2004; Дараган 2011: 563-588)。メドヴェツカヤが論じたように(Медведская 1992)、キンメリオイの小アジア侵入は前 722 年以降には始まっているので、彼らを圧迫した初期スキタイがそれ以前に黒海周辺に出現したとしても矛盾はない。ただし、ジャボチン 524 号の銜は、半月形の銜環の直線部分が細くなったものであり(図 10: 3)、北カフカスのクラスノエ・ズミャーナ 1 号墳南墓、シルダリア流域のウイガラク 37 号墳の事例に近くなっている。前者からは I 型銜が出土し、イシュタル神が表現された装飾板も伴う。この装飾板は前 7 世紀後半であることから(雪嶋 2008: 122-123)、初期スキタイが来ても約 100 年間はノヴォチェルカスク類型の馬具が利用されていたことがわかる。

鑿に関しては、ジャボチン 524 号墳の事例は通常のノヴォチェルカスク類型に伴う A 型ではない(図 10: 1-2)。I 型銜が出土したクバン地域のウアシトウ I 号墳(Эрлих 1994, 図 9) 6、I-2 号墳 9 号墓(Эрлих и др. 2009)の事例に類似するが、ジャボチンの鑿の先端が尖っているのに対し、ウアシトウのは匙状になっている。頭絡と通す孔が独立した環になっておらず、鑿の身にあり、先端が匙状になっている事例は、南カフカスのナバグレビ(Nabagrebi) 19 号墓(図 11: 31)、カラケント 47 号墓から出土している。前者は前 10~9 世紀(Ivantchik 2001: 185; Sultanishvili 2018: 403)、後者は 9 世紀末(Ivantchik 2001: 175)という年代が推定されており、古い時期のものである。先端が尖るのは初期スキタイの墓でしばしば出土するので、これらの

<sup>6</sup> ウアシトウ 1 号墓の木材の年代は 810-740 BC と 730-520 BC に分かれたが、アレクセエフら(2005)は前者の年代を採用し、前 8 世紀としている。

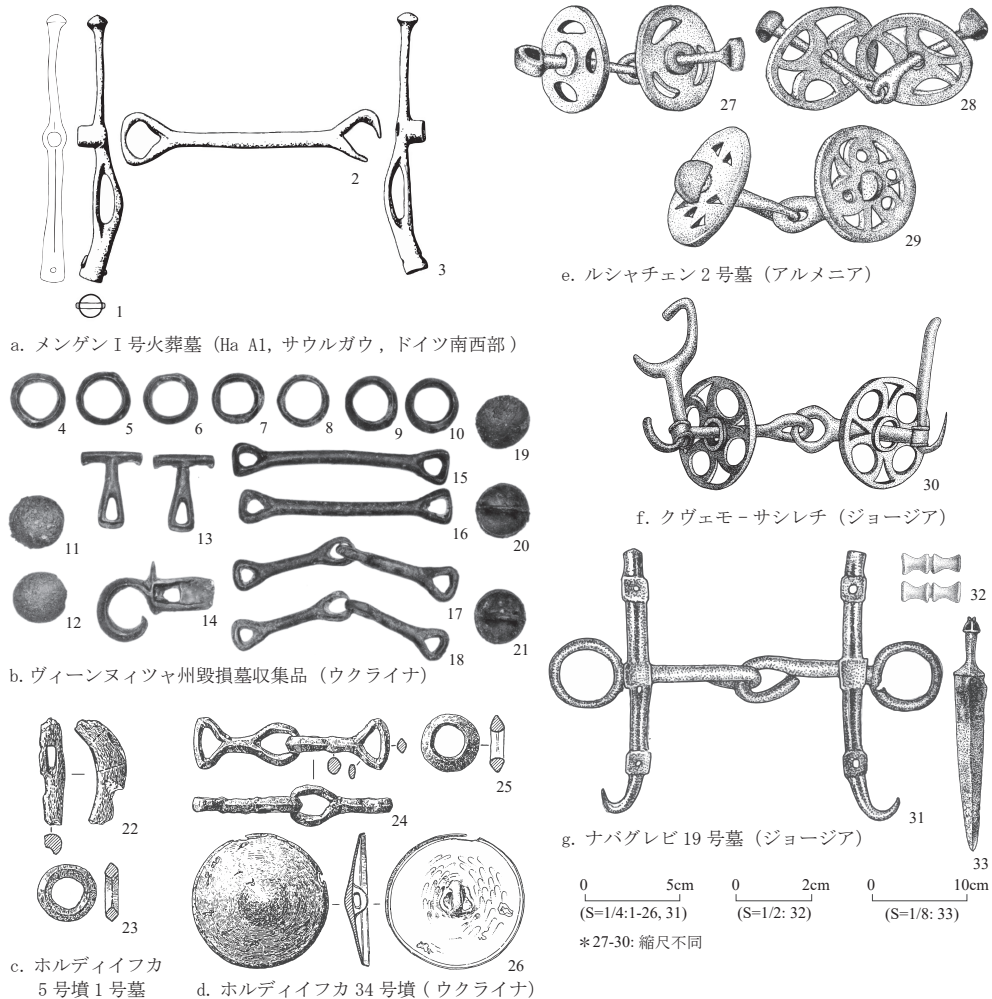


図 11 中・東欧と南カフカスの馬具と関連遺物  
(Hüttel 1981, Клочко и др. 2011, Berežanskaja et al. 1998, Ivantchik 2001)

事実から考えると、ウアシヒトゥ I 号墳に後続するものとして、ジャボチン 524 号墓を置くことができるだろう。また、A 型鑣の三つのリングが半月に近くなったものもスキタイ併存期の前 8 世紀後半以降である。

これまでの研究でも指摘されてきたように、カフカスと黒海北岸はバイメタル短剣や金製品も含めて関係が深い (Тереножкин 1976; Ivantchik 2001; Cunliffe 2019)。金製品を伴うノヴォチェルカスク類型については、かつてはキンメリオイの南下と関連付けて理解されたが (Kossack 1994)、上述してきたように、前 9 世紀段階から副葬される。ゾリノエ 1 号墳 10 号墓のような金製品は北カフカスにいた先スキタイの人々を通じて交易などでもたらされたと考えたほうが妥当であろう。問題はノヴォチェルカスク類型の特徴である独特の I 型銜であるが、その由来は現時点でも曖昧である。ヴァリチャクが「アジア型」とする半月形の下部に小さな孔をもつ

二連銜先は (Вальчак 2009: 77)、ハドホフ (Khadzhokh) 古墳に事例があるものの、初期スキタイ段階で前 8 世紀後半より遡らない。鑣を連結するために二連銜環の後環が形成されたと考えられるが、形式的な変化は追えない。

## 5. 先スキタイ馬具の機能的優位性

馬具の装着方法の変化として、高浜秀は銜環の中に鑣を入れるものに注目し、中国から草原に広がったとしている (高浜 2014; Takahama 2020)。これが馬の操縦の向上に関連するかはわからないが、アルジャン 1 号墳の鑣に残った痕跡をみると、銜と鑣は皮で連結されており (図 2: 13, 23)、アルタイ・サヤン地域では確かに異なる装着方法が採用されていた。チェルノゴロフカ類型も銜と鑣の連結に対して同じような復元がされており (Панковский 2015: fig. 18 など)、ノヴォチェルカスク類型でも鑣は銜環の中に入らないため、皮などで連結されていたと考えるのが妥当である。また、手綱は二連銜環の先端側に通したのではなく、I 型銜の場合、先端環には L 字状金具がつくことが多い。クヴィトキ古墳の事例では、そこに手綱を付けている (図 8: 10-14)。

後世の馬の操縦においては、細かな動作を伝えるのに銜環が可動することが重要であるが、L 字状金具に手綱を着けた場合も同様の効果を得られる。そうすると、チェルノゴロフカ類型の II 型銜が機能的に劣っているように感じられるが、こちらは出土状況と角骨製鑣の観察の結果、鑣の傘状端部を下側にして、そちら側の孔に手綱を連結したようである (Панковский 2015)。確かに傘側の孔の摩耗は激しい (図 4-14)。鑣でワンクッションおいて連結することで、馬のコントロールを微細に行っていたのである。つまり、チェルノゴロフカ類型とノヴォチェルカスク類型には馬を操る技術の向上がそれぞれ異なるかたちで盛り込まれていたといえよう。

アルジャン 1 号墳では手綱を銜環の外側に結着している (図 2: 23)、アルタイ・サヤン地域の原スキタイがみ出した工夫ではない。また、騎馬遊牧民として、騎乗のための改良と考えたいが、ウアシヒトゥ 1 号墳でみられるように (図 9: 1)、戦車にも同様の馬具を用いており、騎馬と戦車の利用の区別を馬具から判断することは困難である。

ここで、比較のため、先スキタイの範囲に隣接する地域の馬具の発展について考えてみたい。まず、西アジアやヨーロッパでは軟質の銜から丈夫な金属銜が出現するが、最初是一本の棒でできた棒状銜であった。その後、中央を環や鉤で連結させた連銜が出現する。

二つの部品を鑄造で連結する銜は、南カフカスで前 15~12 世紀の事例が確認されており、ルシャチェン (Lshachen) 古墳やトレリ (Trelī) 墓地などから出土している (図 11: 27-30)。西アジアの事例からの考古学的な類推であるため、年代は研究者により前後するが、トレリ墓地の事例は前 1450-1300 年頃 (Mrion, Orthmann 1995; Castelluccia 2017)、或いは前 13 世紀以前とされている (Ivantchik 2001)。これには鑣がついていないが、片方の端部がリングになったフックが伴っている。このフックは前 13 世紀頃のクヴェモ-サシレチ (Kvemo-Sasirethi) の事例のように手綱をかける部位である (Ivantchik 2001: 156, 図 11: 30)。なお、中央が屈曲した三孔をもつ青



1. Tukulti-Ninurta II 時代の戦車図の一部 (891-884 BC, Asur, BM115705)
2. Ashurnasirpal II 時代の戦車図の一部 (875-860 BC, Nimrud, BM135741)
3. Ashurnasirpal II 時代の騎乗図の一部 (ca.874 BC, BM, Nimrud, BM124558)
4. Sargon II 時代の馬頭部 (721-705 BC, Khorsabad, BM118833)
5. Sargon II 時代の馬頭部 (721-705 BC, Khorsabad, BM118831)

図 12 アッシリアの馬具着装事例 (©British Museum, Curtis and Tallis 2012)

17-18) が出土しており、雪嶋宏一 (2014) は前 1200 年頃に棒状から連結への変化がおこったという重要な指摘をしている。また、ホルディイフカ古墳からは前 1200~900 頃とされる角鑣 (図 11: 22) と連結銜 (図 11: 24) が出土しているが (Berezanskaja et al. 1998)、後者は形態的に独特で先スキタイの馬具にはつながらない。

アッシリアの図像では、サルゴン 2 世期 (前 721-702 年) にはチェルノゴロフカ類型と同様に手綱を鑣の下孔に通す事例がみられる (図 12: 4-5)。キンメリオイの南下で生じた変化の可能性も考えられるが、トゥクルティ・ニヌルタ 2 世 (前 891-884 年) の時代でもそれらしき図像があり (図 12: 1)、草原地帯と同じか早い段階で手綱結着の工夫がみられることになる。ただし、アッシュールナシルパル 2 世 (前 875-860 年) の時代には、明確に銜環に手綱を通した事例がある (図 12: 2)。また、不確かであるが、鑣の中央孔と下部孔の間に手綱を結んだよ

銅製の棒状鑣もみられるが<sup>7</sup>、この種の鑣の出現過程は不明瞭である。骨角製鑣から転化した可能性が高いものの、草原地帯では青銅器化していない。

一方、中・東欧の後期青銅器時代には、ヒュッテルがメンゲン-カイステン (Mengen-Kaisten) 型 (図 11: 1-3) とした細楕円形孔と小さい円形孔をもつ鑣がみられる。こちらの銜は端部が円形で棒状である。黒海北岸ではヴィーンヌイツャ州の毀損墓の収集品で、棒状銜 (図 11: 15-16) と連結銜 (図 11:

<sup>7</sup> これらの年代もやはり西アジアからの類推であるため、研究者によって編年観が異なる。サゴナは三孔をもつ中央が屈曲した棒状鑣を前 14 世紀頃として円形鑣より古くするが (Sagona 2018)、カステルシヤは前 14-13 世紀とし (Castelluccia 2017)、円形鑣よりも新しく位置付ける。

うな騎馬図像もある (図 12: 3)。そのため、必ずしも西アジアで手綱結着の工夫が定着していたわけではない。

以上のことから、南カフカスのほうが連結銜を早く生み出しており、中・東欧の草原地帯ではやや変化が遅れることがわかった。連結銜のほうが操縦に自由度が生まれるため、操縦に関する馬具の改良に関しては草原地帯より南で進行したようである。さらに、定型化されていないが、手綱結着の工夫も西アジアでみられるため、当時台頭してきた騎馬遊牧民の馬具が操縦において優位であったとは言い難い状況にある。

## 5. 結論

これまで先スキタイの馬具を中心に論じてきたが、チェルノゴルフカ類型とノヴォチェルカッスク類型は前者が先行するのではないことが再確認された。また、銅鏃の型式から前 9 世紀段階の古い事例を設定することができた。問題は騎馬遊牧民の拡散の時期であるが、東方から西方への影響を重視するのであれば、チェルノゴルフカ類型の鏃の形成から考えて、先スキタイより前に起こったと考えるべきである。

アルジャン 1 号墳の年代は前 9 世紀末であるが、現在、確認されているトゥンヌグ (Tunnug) 1 号墳はより遡る可能性が示されている (Casparia et al. 2018)。今後は、アルタイ・サヤン地域でカラスク文化末期からのタガール文化初期の馬利用に関連する変化を明らかにしていく必要があるだろう。現時点ではハカスのトルガジャクで三孔の骨角製鏃が出土しており (Савинов 1996; 高浜 2014)、アルジャン 1 号墓の事例 (図 2: 27) に連続する様相をもっている。加えて、アルジャン 1 号墳段階にも先端の尖った角鏃が確認されていることから (Тишкин, Серегин 2019)、アルタイ・サヤン地域でも B 型鏃が形成される材料自体は揃っている。ウサトヴォ型から B 型鏃への変化は、黒海北岸と同時進行というのが現時点では妥当であるだろうか。とはいえ、金属銜の出現過程など不明な点はまだ多い。

草原地帯での馬利用はアンソニーを代表として (Anthony 2007)、初期から優位にあると考えられることが多いが、馬具の改良については、メソポタミア北部から南カフカスで先行しているようである。また、少なくともアルタイ・サヤンよりも黒海周辺の鉄器時代の騎馬遊牧民のほうが、馬の操縦に関する改良を行っている。考古遺物からの検証は困難ではあるが、鉄器時代に席捲した騎馬遊牧民の優位性を考える際、道具ではなく、技術や戦略をより重要視すべきかもしれない。

本稿はドイツ考古学研究所での長期研修でふれることができた研究をまとめたものである。資料の収集にあたり、向井佑介氏のご助力を得た。また、馬具の装着に関し、諫早直人氏にご教示をいただいた。なお、本研究は JSPS 科研費 JP18H00736 の助成を受けたものである。

## 引用文献

- 高浜秀 1979 「ソ連における先スキタイ文化の研究」『オリエント』22(2): 100-115.
- 高浜秀 2011 「西周時代の骨角製の鏝の一種について」『金沢大学考古学紀要』32: 1-12.
- 高浜秀 2014 「中国初期のくつわをめぐって」『金沢大学考古学紀要』35: 25-44.
- 中村大介 2012 『弥生文化形成と東アジア社会』 塙書房.
- ヘロドトス (松平千秋訳) 1972 『歴史』(中), 岩波文庫.
- 雪嶋宏一 2008 『スキタイ: 騎馬遊牧国家の歴史と考古』 雄山閣.
- 雪嶋宏一 2014 「黒海北岸草原地帯における青銅製銜の始原について」『ユーラシアの考古学』249-262, 雄山閣.
- Anthony D. W., 2007. *The horse, the wheel and language*. Prentice Hall, Woodstock.
- Berezanskaja and Kločko V. I., 1998. *Das Gräberfeld von Hordeevka*. VML GmbH, Rahden.
- Bokovenko N. 2006. The emergence of the Tagar culture. *Antiquity*. Volume 80, Issue 310: 860-879.
- Bouzek J., 2001. Cimmerians and Early Scythians: the transition from geometric to Orientalising style in the Pontic areas. *North Pontic Archaeology: Recent Discoveries and Studies*. Brill, Leiden.
- Casparia, G., Sadykova T., Blochinc J. and Hajdas I., 2018. Tunnug 1 (Arzhan 0): an early Scythian kurgan in Tuva Republic, Russia. *Archaeological Research in Asia*. 15: 82-87.
- Castelluccia M., 2017. Transcaucasian Iron Age Metal Horse Bits. *Iran and the Caucasus*. 21: 1-12.
- Cunliffe B. W., 2019. *The Scythians: nomad warriors of the steppe*. Oxford University Press, Oxford.
- Curtis and Tallis, 2012. *The horse: from Arabia to Royal Ascot*. British Museum Press, London.
- Daragan M. N., 2004. Periodisierung und Chronologie der Siedlung Žabotin. *Eurasia Antiqua*. 10: 55-146.
- De Mulder G., Van Strydonck M., Boudin M., 2009. The Impact of Cremated Bone Dating on the Archaeological Chronology of the Low Countries. *Radiocarbon*. 51(2): 579-600.
- Grijaznov M., 1984. *Der Großkurgan von Aržan in Tuva, Südsibirien*. C.H. Beck, München.
- Hüttel H. G. 1981. *Bronzezeitliche Trensen in Mittel- und Osteuropa: Grundzüge ihrer Entwicklung*. C.H. Beck, München.
- Ivantchik A. I., 2001. *Kimmerier und Skythen*. Steppenvölker Eurasiens Band II. Moskau.
- Kimmig W., 1981. Ein Grabfund der jüngeren Urnenfelderzeit von Singen. *Fundberichte aus Baden-Württemberg*. 6: 93-119.
- Kossack G., 1994. Neufunde aus dem Novocherkassker Formenkreis und ihre Bedeutung für die Geschichte steppenbezogener Reitervölker der späten Bronzezeit. *Il mar Nero*. I: 19-54.
- Krzewińska M. et al., 2018. Ancient genomes suggest the eastern Pontic-Caspian steppe as the source of western Iron Age nomads. *SCIENCE ADVANCES*. 2018(4): eaat4457.
- Makhortkykh S. V., 2004. The North Black Sea Steppes in the Cimmerian epoch. *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia*. 35-44. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Makhortkykh S. V., 2008. On the Question of Cimmerian Imports and Imitations in Central Europe. *Import and Imitation in archaeology*. 167-186. Beier & Beran, Langenweißbach.



- Miron, A., Orthmann W. eds. 1995. *Unterwegs zum goldene Vlies. Archäologische Funde aus Georgien, Saarbrücken.*
- Parzinger H., 2013. *Ukraine and South Russia in the Bronze Age. The Oxford Handbook of the European Bronze Age.* 898-918. Oxford University Press, Oxford.
- Sagona A., 2018. *The Archaeology of the Caucasus: From Earliest Settlements to the Iron Age.* Cambridge University Press, New York.
- Takahama S. 2020. Two technical traditions of casting horse bits in China and their relationships with the steppe area. *Asian Archaeology.* 3(1-2): 47–57.
- Potratz H. A., 1941. Die Pferdegebisse des zwischenstromländischen Raumes. *Archiv für Orientforschung.* 14: 1–39.
- Алексеев А. Ю. и др., 2005. *Евразия в скифскую эпоху: Радиоуглеродная и археологическая хронология.* ТЕЗА, Санкт-Петербург.
- Бокий Н. М., Горбул Г. П., 1985. Могила киммерийского всадника у села Чечелиевка Кировоградской области. *Советская археология.* 1985(4): 224-227.
- Вальчак С.Б., 2009. *Конское снаряжение в первой трети I-го тыс. до н.э. на юге Восточной Европы.* Таус, Москва.
- Вальчак С.Б., 2018. Новочеркасский клад 1939 г.: эпонимный памятник предскифского периода. *Древности. Исследования. Проблемы: Сборник статей в честь 70-летия Н. П. Тельнова.* 137-146. Кишинев-Тирасполь.
- Вязьмитина М. И., 1963. Ранние памятники скифского звериного стиля. *Советская археология.* 1963(2):158-170.
- Дараган М. Н., 2011. *Начало раннего железного века в Днепровской Правобережной Лесостепи.* КНТ, Киев.
- Иессен А. А. 1953. К вопросу о памятниках VIII-VII вв. до н.э. на юге европейской части СССР. *Советская археология.* XVIII: 49-110.
- Клочко В. И., Мурзин В. Ю., 1987. О взаимодействии местных и привнесенных элементов скифской культуры. *Скифы Северного Причерноморья.* Киев.
- Клочко В. И., 2009. Происхождение Скифов. *Эпоха Раннего Железа.* 151-166. Институт археологии НАН Украины, Киев-Полтава.
- Клочко В. И., Козыменко А. В. 2011. *Наш недавний бронзовый век.* Киев.
- Ковпаненко Г. Т., Гупало Н. Д., 1984. Погребение воина у с. Квитки в Поросье, *Вооружение скифов и сарматов.* 39-58. Наукова думка, Киев.
- Колотухин В. А., 2000. Поселение эпохи поздней Бронзы Бай-Кият в Крыму. *Stratum plus.* 2000(2): 526-553.
- Махортых 2008. *Культура и История Киммерийцев северного Причерноморья.*
- Медведская И. Н., 1992. Периодизация скифской архаики и Древний Восток. *Российская археология.* 1992(3): 86-107.
- Панковский В. Б., 2015. Слободзейские псалии. *Stratum plus.* 2015(3): 265-296
- Петренко В. Г., 1982. Комплекс VIII–VII вв. до н. э. из Ставрополя. *Краткие сообщения Института археологии.* 170: 70-73.
- Рябкова Т. В., 2014. Курган 524 у с. Жаботин в системе памятников периода скифской архаики. *Российский археологический ежегодник.* 2014(4): 372-342.

- Савинов Д. Г., 1996. *Древние поселения Хакасии: Торгажак*. Санкт-Петербург.
- Синика В. С., Разумов С. Н., Тельнов Н. П., 2016. *Археологическое Наследие Приднестровья*. Тирасполь.
- Тереножкин А. И., 1976. *Киммерийцы*. Киев.
- Тишкин А. А., Серегин Н. Н. 2019. Предметы конского снаряжения из курганов бийкенской культуры Северного Алтая. *Кочевые империи евразии в свете археологических и междисциплинарных исследований: IV международный конгресс средневековой археологии евразийских степей, посвященный 100-летию российской академической археологии. 87-90*. Издательство БНЦ СО РАН, Улан-Удэ
- Эрлих В. Р., 1994. *У истоков раннескифского комплекса*. Москва.
- Эрлих В. Р., Вальчак С. Б., Маслов В. Е., 2009. Протомеотские погребения из кургана 2 могильника Уашхиту I. *Эпоха Раннего Железа*. Киев-Полтава.